

その人らしい最期を支えるエンゼルケアを考える

～葬儀社へのアンケート調査からみえた事～

緩和ケア病棟 ○時川利菜 石橋美代子 小林美佐子 溝上千代美 大坪悦子

【目的】エンゼルケアは亡くなった人への最後の看護援助であり、私達は最期（火葬）まで、その人らしい姿で送り出したいという気持ちでケアを行っている。当院緩和ケア病棟では年間170名の看取りを行っているが、葬儀社にご遺体を引き渡し後、腐敗による遺体トラブルから、ご家族につらい思いをさせた経験がある。このことからトラブルの現状把握と対処方法を検討する必要性を感じた。今回、葬儀社へアンケート調査を行い、現状把握と今後の課題を見出すことを目的とし本研究に取り組んだ。

【方法】研究対象者：近隣の葬儀社6社職員(42名、うち8名納棺士含む)に対するアンケート調査
研究方法・分析：葬儀社毎にアンケート用紙を送付し無記名で記入後に返信されたものを、カテゴリー毎に集計し分析。選択・記述式回答(複数回答可)

調査内容：対象者の経験年数・遺体トラブル(当院に限らずこれまで経験したご遺体トラブル)の内容・家族の反応・葬儀社の対応や思い・病院への要望で構成

アンケート期間：平成30年7月1日～平成30年7月15日

【結果】回答者の経験年数は3年以上が全体の9割で、遺体トラブル経験者は79%。「トラブルの内容」は出血(81%)、体液の漏れ・開口(62%)、悪臭・開眼(60%)の順であった。出血部位としては、鼻腔・口腔(63%)に次いで点滴抜去部(50%)であり、体液漏れとしては口腔(55%)、鼻腔(45%)、点滴抜去部(43%)、浮腫からの漏れ(40%)の順であった。悪臭は口臭が55%と最も多く、原因は腐敗臭であった。トラブルのタイミングで多かったのは搬送中(71%)、安置後(67%)であった。「遺体トラブル時の家族の反応」は、何とかしてほしい(79%)、不安(43%)、病院の処置への疑問(29%)等で、対する「葬儀社の対応」は、原因の説明を行った(74%)、家族にわからないよう処置をした(40%)であった。「遺体トラブル時の葬儀社の思い」としては、できることはしてほしい(60%)、家族へ事前説明してほしい(57%)、病院で適切な処置をしてほしい(48%)という結果からも、「葬儀社が連携を図るために検討してほしい事項」では、家族への遺体トラブルリスクの説明(90%)が最も多かった。次いで冷却(79%)、胸・腹水の除去(67%)等ハイリスク遺体対応への要望が高く、エンゼルメイク(17%)、湯灌(10%)は低い要望という結果であった。

【考察】遺体は死後、火葬までの数日間の間に変化し、とくに敗血症・腹膜炎・多臓器不全・高体温などで亡くなった場合は、ハイリスク遺体と呼ばれ、死後6~12時間で腐敗による劇的な変化が起きる¹⁾ことが報告されている。当病棟では、出血予防に圧迫固定法、おむつやフィルムドレッシング材使用による汚染防止、腐敗防止に冷却等の対応をしてきたが、改めて個々に応じた対応の必要性を感じた。院内で統一した対応を行うには医療者一人一人が、予測される遺体変化をアセスメントし、予防や対処法について知識や技術を身に付けていく必要がある。また、葬儀社職員も我々と同様に、専門職として遺体トラブルが遺族の心残りにならないように精一杯尽くしたいという思いを理解できたことは、引き継ぎ・引き継がれる関係として、情報が途切れないように、情報共有シートを作成するなどの具体的な申し送り方法を検討していくことが必要であると考え。また、腐敗防止策として胸・腹水除去の希望は高いが、対策としては的確であっても、新たにキズを作ることが、家族にとってつらいことも多く、家族の心情を汲み取りながら決めていくことが大切であり、希望されない場合は冷却を十分に行うなどの代替策を行っていくことが最善の方法だと考える。エンゼルメイク・湯灌や更衣に関する要望は高くはないが、ご家族は「最後まで大切にあってもらえた」、医療者は「きちんと最期までその人らしく送り出せることができた」という思いに繋がり、互いのグリーフケアに繋がっていると考える。

【まとめ】1.起りうる遺体変化をアセスメントし、予防法・対処法についての知識や技術について一人一人が身に付けられるような方法を検討していく。2. 最期までその人らしく見送れるように、葬儀社との具体的な申し送り方法を検討し、連携していく体制作りが、今後の検討課題と考える。

【引用参考文献】1) 伊藤茂：ご遺体の変化と管理―“死後の処置”に活かす、照林社、2009. P52